

グッドプラクティショナー

推薦文

逢澤詳子さんをグッドプラクティショナーに推薦する理由

神奈川県横浜第一病院の逢澤詳子さんをご紹介します。

逢澤さんは、腎臓疾患を中心的に取り扱う病院のソーシャルワーカーとして業務を行う傍ら、1970年代に地域において仲間のソーシャルワーカーの皆さんとともに透析MSW研究会を発足され、「ソクラテスプロジェクト」へと会を発展させながら現在に至るまで30年以上にわたり、所属組織を越えた取り組みを行っておられます。

同会は、例えば通院が困難となった透析患者の送迎の問題や今回ご紹介いただいた震災に際して生じる問題等、地域で生活する患者

さんが直面するさまざまな問題や課題が見えた際に、その解消に向けて活動しておられます。

また、日常的には、ソーシャルワーカーを対象とした事例検討会や講演会開催など、地域のソーシャルワーカーの力量の向上やネットワーク形成につながる活動を行っていますが、このような会のあり方は、地域におけるソーシャルワーク活動のいわば「ベースとしての場」を築いているといえるのではないのでしょうか。

(推薦者：上智大学

総合人間学部准教授 高山恵理子)

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由(200~400字程度)を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：一」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する(3,200字程度)。

私の実践

## 今につながる

### —ソーシャルワーカーの災害時支援活動—

逢澤詳子（横浜第一病院）

#### はじめに

「少し話がしたいんだ」と、宮城出身の A さんが受付にいた私に声をかけてきた。東日本大震災により神奈川県に広域避難された方々の交流会「第34回寄り合い処」でのこと。病院からの書類一式をカバンから取り出し、「からだの心配は、これからどこで暮らそうかを心配しているみんなには話せないんだ。相談は誰でもいいってわけにはいかないからね」と、2011年3月11日から3年半が過ぎ、避難者と支援者の間を取り持つ役割を担ってこられた一人でもある A さんからの相談であった。私の脳裏には、先の阪神淡路大震災で A さんと同じ役割を担われて病に倒れた B さんの顔が浮かんできた。当時、広域避難者の座談会「三年……」を開催して文集を作成した後のことだったから、同じ頃か……。会場には、出身地からの相談員、神奈川県での相談員の顔も、参加されている方々は、このひと月の情報交換に熱が入っていた。被災体験、出身地だけではひとつになれないときがきていた。

私は慢性腎不全医療に携わるソーシャルワーカーとして、そのソーシャルワーク実践の一環として災害後の支援活動を続けてきた。ここでは、私が仲間と共に実践してきた「透析施設 MSW 研究会（以下、「えむけん」）」から始まり、「ソクラテスプロジェクト」に、そして「東日本大震災被災者支援団体連絡会 in かながわ」に繋がるソーシャルワーカーの災害時支援活動について報告する。

#### 活動の「場」の始まり

「えむけん」は、1979年5月、関東近県の慢性腎不全医療にかかわる7名のソーシャルワーカーを中心に、自主研究会として発足した。事例検討を基本に据え、ソーシャルワーカーとしての専門性や技量、見識を向上させることと、社会的役割を果たす（講演会を通じてソーシャルワーカーの存在をアピールすることや、福祉や人権について一般市民とともに考える）ことを目的として運営してきた。「えむけん」は、代表者は置かず、そのときもそして今でも自主研究会であり、いつでも自由に異論を言い合える、相談し合える、協働できるソーシャルワーカーの集団として、今に至っている。

歩みを続けていくと、道が大きく開けるときがある。「えむけん」のそれは、1990年からの全国腎臓病協議会（以下、全腎協）との電話相談事業の開始である。全腎協とは、1971年に結成された、腎臓病患者やその家族の全国組織のセルフヘルプグループである。その全腎協が初の公益事業として「ソーシャルワーカーによる電話相談事業」を企画し、その相談員として私たち「えむけん」との協働がスタートした。この事業も20年を越えた。事業を通して全腎協との間に育まれた信頼と連携のもとに、私たちの活動の「場」は職場から社会へ広がることになった。1995年1月17日の阪神淡路大震災を契機に発足した「ソクラテスプロジェクト」の始動であった。

## まず 自ら 動くべし

1995（平成7）年1月20日の夜、「えむけん」事務局のある横浜第一病院会議室にメンバーが緊急集合した。「ソーシャルワーカーとして何ができるだろう」「慎重に」「できることを捜す」などと、熱く長い話し合いのすえ、「専門職である社会の一員として踏み出そう！」と決まった。私たちはこの活動を「ソクラテスプロジェクト」と名づけた。名前の由来は、かの高名なソクラテスの言葉「まず、自ら動くべし」にある。哲人の言葉の中に、理念としての社会福祉の基本姿勢「出会いから始める」をみたからであった。活動の目的は、被災者への支援と、地域の支援ネットワークづくりに参画し、真の社会復興に役立つこととした。私たちは、被災地の社会的弱者と言われる方々を友愛訪問したり、必要に応じて専門的な支援を行っていった。当時、この活動に参加した全国のソーシャルワーカーは約200名、福祉を学ぶ学生、企業の人権啓発担当者などの一般ボランティアは約100名。専門職と一般ボランティアがチームを組む友愛訪問をコーディネートするのが私たちの役割であった。

この友愛訪問は、被災地の最後の仮設住宅が解消されるまで続けていった。そして、復興を目指す被災地と私たちが日常暮らす地域との繋がりを求めて毎年贈り続けた「手作り鯉のぼり」は、「神戸の街の風物詩になったなあ」と言われた。

## 広域避難者との出会い

私たちは被災地での活動と並行して、関東圏に広域避難して来た被災者への支援活動を展開した。当時、広域避難者に対しては、その実態把握がなされないまま、被災者支援の輪の外に置かれていた。

私たちはまず、仲間を通して行政の協力を得、「首都圏（1都10県3市）の公営住宅入居者実態調査」を実施した。その結果とその際のヒアリングから、多くの自治体は、市町村の財政負担公平化を理由に、被災者に対して分散受け入れ方式を採用していることが明らかになった。このことは受

け入れ自治体に、「被災という共通体験や被災地の文化のつながりが、被災者の癒しの場としてのコミュニティに重要である」という認識がなかったことを物語っている。また、どの自治体も住居の確保は行ったものの、他の保健・福祉サービスを連携させた対応は行っておらず、さまざまなサービスが独自に、かつバラバラに提供されていた。私たちは、こうした独自調査の結果も踏まえ、広域避難者との出会いの場を求めて、ソーシャルワーカーによる電話相談事業「グリーンコール横浜」を、行政との連携により、横浜駅徒歩5分に位置する「かながわ県民活動サポートセンター」の一室で開始した。

この電話相談2日目に、マスコミから取材の要請があった。こうした支援活動の「場」の存在を必要な人に知ってもらい活用してもらうためには、広報活動は不可欠である。プライバシーに関する情報の取り扱いについて、仲間からは危惧する声も多かった。そこで、プライバシー保護についての綿密な確認の上、取材を受けることにした。結果、被災者のそして私たちの想いを伝える映像が茶の間に流れた。後に、この間のプロセスに付き添ったテレビディレクターが、デスクと掛け合い、徹夜で編集作業を行ったと知った。「支援する」ということ、「支えて、支えられて、共に」ということを改めて実感した出来事であった。

その後、私たちは、電話相談で出会った被災者の要望に応える形で避難者交流会「みんなでしゃべらへん」を開催した。その会場には、いつも被災地自治体の復興担当職員の姿があった。

電話相談事業は最後の相談者に他の相談先が見つかったあとに、広域避難者交流会は参加者の高齢化と開催要望が遠のいたあとに、潮が引くように終了となった。ソーシャルワーカーとして、災害時の支援活動の重要性と日頃の市民との関係の重要性を再認識した私たちは、それまでの活動を通してできていた「神奈川県内の防災・減災に関する市民活動団体」との顔の見える関係を大切に繋げ広げていくことに努めた。

## 継続は力なり

2011年3月11日、広域大震災とそれに伴う原発災害という、まさに未曾有の大災害、東日本大震災が起こった。私たちは、即、それぞれが所属する職能団体や市民活動団体の呼びかけに応じて、被災地への緊急支援活動を開始するとともに、関東に避難して来られた被災者への支援活動も開始した。その中で、ソクラテスプロジェクトには、神奈川県から、県内在住の広域避難者支援の「神奈川避難者見守り隊（以下、見守り隊）」のボランティア選考役を担ってほしいとの依頼があった。「見守り隊」とは、緊急雇用した県職員と一般ボランティアが一体となって、避難所から公営住宅や民間借上げ住宅に移り住んでいる被災者への見守り活動を展開する組織である。この見守り隊事業は、神奈川県社会福祉士会への委託事業として展開し、見守り隊を卒業した一般ボランティアたちは、自らを「寄り添いたい」と命名し、現在は顔の見える活動仲間となっている。その後、社会福祉士会と共にソクラテスプロジェクトは神奈川県からの要請で、「避難者支援会議」のメンバーとなった。

私たちは、思いを共有する仲間とともに、2011年5月12日、かながわ県民活動サポートセンターにおいて、「東日本大震災被災者支援団体連絡会 in かながわ（以下、連絡会）」を発足させた。準備会に参加したのは、医療ソーシャルワーカー（MSW）、精神科ソーシャルワーカー（PSW）、社会福祉士、ケアマネジャー、社会福祉協議会、福祉関係者、外国人支援ボランティア、難病患者、

災害ボランティア等々、それぞれが所属する団体の会長をはじめとする主要メンバーであった。事務局は、これまでの活動経験からソクラテスプロジェクトが担うことになった。この連絡会は、毎月の定例会で互いの支援活動の情報交換を行い、「寄り合い処」と名づけた避難者交流会を毎月開催し、年一回は講演会を実施している。最近の定例会や交流会には、被災地県の職員（委託も含む）も参加し、共に情報交換を行っている。

現在の私たちは、再開した電話相談や交流会の円滑な運営と個別相談への対応などに、日頃の専門性を活かした支援活動を行っている。交流会での私たちの役割は、新しい参加者が来場されたら、その方々がスムーズにみんなの輪に入れるように、それぞれの参加者の表情を見守りながら場が和むように、そして、みんなが満足した時間を過ぎて場を去れるようにすることである。ここで問われるのは、まさにグループワークの技量である。

## おわりに

「ソクラテスさん、今回も子どもたちに車椅子から自動車への乗降介助の仕方を教えてよ」との声がかかった。毎年1月に開催し続けている防災ギャザリングの実行委員会でのこと。サブテーマは「防災・減災は友だち作りから」。この催しは来年で20年になる。私たちは、地域の一員でもあるソーシャルワーカーとして、自らの専門性を活かす働きかけを続けていきたい。明日につながる歩みを、共に。